

『撰集抄』にみられる他書との類似表現

——詩歌関係を中心に——

安田孝子

はじめに

『撰集抄』の説話の多くは、「説話」部分と、そしてその説話に対して批評を加えた「説話評論」部分によって構成されている。「説話」部分については、それが、先行説話と類話関係にある場合、その文章といくらか似るのは当然である。「説話評論」部分について、文章、文体をみると、他書から字句を借用、引用し、文を作り上げている場合も少なくないことに気づく。それは、大きく分けて一つには仏教書からの影響を指摘することができ、一つには詩歌との関係ということになる。

今回は、本文中に採られた詩歌の出典、および他書における詩歌との類似表現を、「説話評論」部分に限らず、「説話」部分も含め全体にわたって検討したい。

表一『撰集抄』における詩歌

区 分	和歌			詩	計
	上下句 に記す	共 計	上下句 に分けて記す		
卷					
1	4首				4
2	6				6
3	4				4
4	3		1	1	5
5	4		2		6
6	11		4		15
7	2		1		3
8	25		1	13	39
9	8				8
合 計	67		9	14	90

『撰集抄』に引用される詩歌

『撰集抄』は、仏教説話集の一つとして認められているが、しかし卷八のみは、主として詩歌・芸能譚が集められ、特殊な巻の存在する説話集である。従って『撰集抄』に引用される詩歌は、表一に示した通り巻八において極めて多い。

文中にそのまま引用される和歌は、全九巻中に六十七首、本来一首の歌であったものを、連歌風に上句・下句と分けて記すものは九首、詩は十四ヶ所に引用される。表一を参照されたい。

『撰集抄』に引かれる詩歌九十首のうち、出典あるいは影響関係のわかったものは、七十三である。それは、表二に☆印を付した。

先ず歌についていえば、表一に示したように、和歌をそのまま引用しているもの、あるいは連歌風に上・下句を別人が詠んだ如く引用するもの、合わせて七十六首ある。その出典と思われる歌が勅撰集のどの歌集にみられるかを、表三「原文のまま引用している場合」の欄に示した。『古今集』六首、『拾遺集』七首、『金葉集』二度本五首、そして『撰集抄』と時代の近い『新古今集』からの引用は十一首、勅撰集中では最も多い。また、『和漢朗詠集』にみられる歌は二十首もあり、『撰集抄』への影響が重視される。他に『宝物集』『土御門院御百首』などに収載される歌との関連が指摘できる。表三と共に表二も参照されたい。

漢詩については、その多くが巻八に集中し、しかも『和漢朗詠集』からの引用が殆んどである。表二の下段は、『和漢朗詠集』を特別に扱い、本文には△印を付して示した。これによって明らかな如く、『撰集抄』に詩の二句以上にわたりそのまま同文的に引用されるのは十二に及ぶ。

以上、詩歌が原文を崩さず、そのまま引用された点について述べた。

和歌・詩文に依拠した表現

『撰集抄』は、対句表現、漢字四文字による成語などを用い、語調の整った美文が随所にみられる。また、五、七といった、いわば和歌の基本語数に合わせた口調のよい表現が主体となっている。

例えば、松平文庫本の本文によって示せば次の如くである。

△例一〇 巻一第六話

④⑤ 拾遺集ほか

世中を何にたとへん、あさ朗漕行舟の迹の白波の消ぬめるは。秋の田をほのかに照す宵の稲妻のやがて光の見えざんめるは。

△例一一 巻一第六話

⑥ 詞花集八巻下 251

とはぬまを、うらむらさきの藤の花、何とて松にかかりそめけるぞと、かりの身に恨を残し、あふことや泪の玉のとなりけん、しばしたゆれば、おちてみだるううさと悲て、かりのやどに思を増……

△例一二 巻一第八話

何事も夢にのみなる世中に、思ひを留て、竹の葉にあられふるなりさらくと、聞ば独は寝ぬべき心ちもせず。夕暮

⑦ 詞花集八巻下 254

⑧ 金葉集・詞花集八巻下 252

⑨ 後拾遺集・宝物集

詞花集八恋下²⁴⁹

新古今集

詞花集八恋下²⁴⁸

詞花集八恋下²⁵⁷

は物思ふ事のますかと、よ所になしても問たく、こぬ人を恨はてぬ物ゆへに、松に懸ればうらむらさきの藤花、かけ

ひの水のたえぐになり行底にかげみえで、心細さの音を聞にも……

ひの水のたえぐになり行底にかげみえで、心細さの音を聞にも……

〈例四〉巻六第三話（五一話）

新古今集

新古今集 俊成女

嵐ものうく吹て、峰にわかるゝよこ雲のそらをかなしみ、面かげも契しもわすれながらうつゝとおぼえねば、夢
かとわきかねても、誰にとはまし草の原、色かはる露をば袖にをきまよひても、霜かれはてゝし、野辺のうきなんど
をかなしみ、……

〈例五〉巻四第四話

吹よぎ吹すぎぬる風に付ても、無常むねをこがし、南枝北枝の梅、開落異にしてうつり、田地に氷消て芦錐短、新柳
風にかみけつりて、旧苔浪ひげをあらふ。四季の替にも無常は……

右に五例挙げた。その傍線部(A) (B)は、次の歌、あるいは詩を下敷にした表現と考えられる。表二も参照していた
だきたい。

例一

(A) 世の中をなになにたとへむ朝ぼらけこぎゆく舟のあとの白浪 (表二8)

(B) よのなかをなになにたとへむあきのたをほのかにてらすよひのいなづま (表二9)

例二

(C) とはぬまをうらむらさきにさくふぢのなにとてまつにかかりそめけむ (表二11)

(D) あふことやなみだのたまのなるらんしばしたゆればおちてみだる (表二12)

例三

⑤ たけの葉にあられふるなりさらさらにひとりぬべき心ちこそせね(表二24)『詞花集』諸本中には第三句「さらさら」とする本文もみられる)

⑥ ゆふぐれにもの思ふことはまさるやとわれならざらむ人にとはばや(表二25)

⑦ 袖のうへにたれゆゑ月はやどるぞとよそになしても人のとへかし(表二26)

⑧ こぬ人をうらみもはてじぎりおきしそのことはもなさけならずや(表二27)

⑨ おもひやれかけひのみづのたえだえになりゆくほどのころぼそさを(表二28)

例四

⑩ 春の夜の夢の浮橋とだえして嶺に別るる横雲の空(表二85)

⑪ 夢かとお見しおもかげも契りしも忘れずながらうつつならねば(表二86俊成女)

⑫ ①尋ぬべき草の原さへ霜がれて誰にとはまし道芝の露(狭衣物語卷二上、表二87①)

⑬ ②霜がれはそこともみえぬ草の原誰に問はまし秋のなごりを(新古今集卷六11、俊成女、表二87②)

⑭ ③いろかはる露をば袖におきまよひうらがれて行くのべの秋風(表二88俊成女)

例五

⑮ 東岸西岸の柳 遅速同じからず 南枝北枝の梅 開落已に異なり(表二60)

⑯ 氷田地に消えて蘆錐短し 春枝条に入って柳眼低れり(表二61)

⑰ 気霽れては風新柳の髪を梳る 氷消えては浪旧苔の鬚を洗ふ(表二62)

〈例一〉は、共に無常を詠じた歌二首を用い、初句、二句が二首とも同文であるところから二つをかけて連続したものである。

〈例二〉〈例三〉は、『詞花集』より歌を借用して文章化したものである。殊に『詞花集』の巻八恋下から集中して採り、『国歌大観』（新編）の番号でいえば、248 249 252 254 257 258 といったように、ある限定された部分からとりあげていることがわかる。これは恐らく作者が『詞花集』を直接見ているのであろう。

〈例四〉は、『新古今集』との関連を示す例である。ここは『新古今集』に所収された歌を部分的に用いて作られた文であるが、『新古今集』からの引用歌が上・下句別記するものを含めて十一首もみられることを考え合わせると、直接か、あるいは間接に影響を受けていると思われる。傍線部①は、出典がはっきりしないので、二つ示した。①は、『狭衣物語』において、狭衣が飛鳥井の姫君の死を聞き、その折に詠じたもので、②の本歌といわれる。^(注2)しかし『撰集抄』の場合は②に依っているかと思われる。それは〈例二・三〉が『詞花集』に依っていたと同様に、〈例四〉は『新古今集』をもとにしていないのではないかと考えるからである。しかも①は定家のよく知られた歌、^(注3)②、③は、俊成女の詠という点で統一性が感じられるのである。ただこの四首は、共に『自讃歌』にも収められるという一つの方向をみると、『新古今集』から直接引用と決めつけ得ず、歌が書き抜きされていた小冊子の存在も考えられなくはない。

〈例五〉は、『和漢朗詠集』との関連を示すものである。傍線部④・⑤・⑥の典拠となる詩は、共に、『和漢朗詠集』巻上、春〈早春〉に収められる。『和漢朗詠集』、あるいはその注釈書^(注3)から得た表現とみてよい。

以上、例文によってみた如く、『撰集抄』の説話作者は、単に詩・歌をそのまま引用するだけでなく、他書にみられる詩歌を参考とし、部分的に引きなして、自分の文章として上手に書き上げることの出来る人物である。表二は、『撰集抄』への引用歌も含め、右に例示したような類似性を指摘したものである。

表二 『撰集抄』にみられる他書との類似表現——詩歌関係を中心に——

- 一、この表は、特に『和漢朗詠集』との関連に重点を置いて作成した。下段の巻・番号および本文(△印)は、日本古典文学大系『和漢朗詠集』によった。
- 二、歌番号は、『新編 国歌大観』第一・二巻によった。『和漢朗詠集』も大系本とはほぼ一致する。
- 三、本文は、それぞれの作品において異同のある場合が多い。『和漢朗詠集』以外は、最初に掲げた作品によった。『新編 国歌大観』に所収されるものはその本文に従った。
- 四、詞書は、必要な場合のみ記した。
- 五、『撰集抄』内における類似の表現は、初出の項目に集めて記した。
- 六、『撰集抄』松平本における誤字は、諸本により校訂した。
- 七、『名歌辞典』を参照した。(☆印は引用詩歌、他は引き歌形式のもの。)

番	巻	話	校本 行数	撰集抄松平本文	巻	番号	和漢朗詠集(△印)、およびその他の詩歌
1	一	一	41	○三尺の剣を抜て、一陣を懸て、	下	653	△漢高三尺の劍坐ながら諸侯を制す 張良一巻の書立ち どころに師傳に登る (後漢書)
☆ 2	一	二	64	○ながき世のくるしき事を思へかし仮の 舎を何歎らん	下	687	△三尺の劍の光は氷手に在り 一張の弓の勢は月心に当 れり (陸羽軍)
							△雄劍腰に在り抜けばすなはち秋の霜三尺 雄黄口より す 吟ずればまた寒玉一声 (順)
							参考、閑居友下一〇
							おやの処分をゆゑなく人におしとられけるを、この事 ことわり給へといなりにこもりていのり申しける法師 の夢に、くしろのうちよりいひだし給へりける歌
							○ながきよのくるしきことをおもへかしなになげくらむ かりのやどりに

☆ 6	5			4	3		
一	六	一	一	二 一	二	一	
四	一	七	三	五 二	五	二	
194	2490	373	179	733 92	761	67	
○おきつ波荒れのみ増る宮のうちは……	<p>○往事を春の夢かと思へば、別のつらきは夢にもあらず。旧遊を谷の響かと疑ば、古の音は再不聞。</p> <p>○往事を思給へ。すこしも夢にやかはり侍ると、</p> <p>○往事をおもへば眇忙として、夢にたがはぬ世なれば、悦もなげきもみな空し。</p>			<p>○夜を残す老の寢覚には哀と聞て……</p> <p>○夜をのこす寢覚の牀には哀と情をかけずと云事なし。</p>		<p>○よひにみし人朝に死し、朝にありし類夕に白骨となる。</p> <p>○昨日有し人、今日はなし。朝に世路に誇る類ひ夕べの白骨と成。</p>	
	下			下	下		
	743			724	794		
○おきつなみあれのみまさる宮のうちは……よそにこそ	<p>△往事眇茫として都て夢に似たり 旧遊零落して半ば泉に帰す (白)</p> <p>白氏六集卷一七、千載佳句上感歎⁵¹⁷ 謡曲松山鏡^{カニスルミ}</p> <p>○倩思^{カニスルミ}於旧遊。猶空^{カニスルミ}春夜夢。静安^{カニスルミ}於往事。寧。異^{カニスルミ}水中月。</p> <p>尊師講式(注4)</p> <p>参考、古今著聞集卷一三(四五七)</p>			<p>△老の眠り早く覚めて常に夜を残す 病の力先づ衰へて年を待たず (白)</p> <p>白氏文集卷五八「睡覺」、千載佳句 老病⁵⁴⁷</p> <p>○夜を残す寢覚に聞ぞ哀なる夢野の鹿もかくや鳴くらん 山家集上⁴³⁷ 夫木和歌抄一二⁴⁷⁰⁸</p> <p>○よをのこすね覚のところに思ふかな昔をみつる夢の名残を 続千載集一八¹⁹⁷³</p> <p>○夜を残すね覚の友と成りにけり老の枕にころもうつこゑ 新後拾遺集八⁷⁶⁰</p>		<p>△朝に紅顔あつて世路に誇れども暮に白骨となつて郊原に朽ちぬ (義孝少将)</p>	<p>詞花集一〇409 宝物集九冊本四304 袋草紙一〇八後葉集一九575</p>

10	9	8	7	
一	四 一	四 一	九 一	
六	二 六	二 六	五 五	
293	1463 283	1463 283	2155 227	
○別れし野辺をみれば浅茅が原の秋風の み身に入て、	○世中を何にたとへん……秋の田をほの かに照す宵の稲妻の…… ○何にたとえん世の中を……秋の田をほ のかに照すよひのいなづま……	○世中を何にたとへんあさ朗漕行舟の迹 の白波の消ぬめるは。 ○何にたとえん世中をこぎ行舟の跡の白 波	○宇津の山辺の桜み過しがたくて、奥深 尋入て侍りしに、いとどだに鳶の細道 は心ぼそきに ○宇津の山辺に深く分入て	よ所にこそ見め
		下		
		796		
○おもひかねわかれし野辺をきてみればあさぢかはらに 秋風ぞふく (源道濟)	長恨歌のこころをよめる ○よのなかをなににたとへむあきのたをほのかにてらす よひのいなづま 後拾遺集一七 ¹⁰³ 、宝物集二 ⁷⁷ (源順)	△世の中をなににたとへむ朝ぼらけこぎゆく舟のあとの 白浪 拾遺集二〇 ¹³²⁷ 、拾遺抄一〇 ⁵⁷⁶ 、古今和歌六帖三 ¹⁸²¹ 、 金玉集49、枕草子三〇 ⁷ (第五句のみ)、源氏物語総 角(第五句のみ)、古来風躰抄上、新撰髓脳、袋草紙 八二(下句のみ)、宝物集二卷本、方丈記(第五句 のみ)、沙石集五本一一、東関紀行(下句のみ)、源 平盛衰記遠卷一二、小町草紙九四頁(万葉集三 ³⁵⁴)	見め 古今集一九 ⁴⁰⁰⁶ 、古今六帖四 ²⁵⁰⁸ 、俊頼髓脳、 和歌童蒙抄、悦目抄、伊勢集 宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗 う細きに、つたかえでは茂り、心ぼそく、…… ○駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬな らけり 伊勢物語九段、今昔物語集二四一三五、顯昭陳状 (六百番陳状)冬上、新古今集一〇 ⁹⁰⁴	

	11	12	13
	一 六	一 六	一 七 六 五
	296 441	298	321 2832 3796の1 5060
<p>○とはぬまをうらむらさきの藤の花何とて松にかよりそめける</p> <p>○松に懸ればうらむらさきの藤花</p>	<p>○あふことや泪の玉のとなりけん、しばしたゆればおちてみだるゝうさと悲て</p>	<p>○長松のあか月さびたるさるのこゑを聞に、そゝろにはらはたを断侍りける</p> <p>○行宮にあらざれどもはらはたをたち……</p> <p>○あかつきさけぶさるの声……</p> <p>○長松の暁さびたる猿の声を聞……</p>	<p>下 643</p> <p>下 780</p> <p>下 455</p>
<p>金葉集三奏本三165、詞花集九37、玄文集115（初句おもひわび）、新撰朗詠集下652、俊頼韻脳、宝物集九冊本一29、時代不同歌合、新百人一首、奥義抄</p>	<p>○とはぬまをうらむらさきにさくふちのなにとてまつにかかりそめけむ</p> <p>（俊子内親王家大進）</p> <p>詞花集八恋下257、千五百番歌合一八</p> <p>○みどりなる松にかかれる藤なれどおのがころとぞ花はささける（貫之）</p> <p>新古今集二卷下166、貫之集第一、古今六帖六4244、新撰和歌一107</p>	<p>○あふことやなみだのたまのをなるらんしばしたゆればおちてみだるる</p> <p>（平公誠）</p> <p>金葉集三奏本八恋下431、詞花集八恋下252、玄文集104</p>	<p>△暁長松の洞に入れば 巖泉咽んで嶺猿吟ず 夜極浦の波に宿すれば 青風吹いて皓月冷じ （為雅）</p> <p>参考朗詠九十首抄</p> <p>△行宮に月を見れば心を傷ましむる色 夜の雨に猿を聞けば腸を断つ声 （白）</p> <p>白氏文集卷一二「長恨歌」</p> <p>○長松の暁、さびたる猿のこゑをきく（閑居友下一161頁）</p> <p>△江は巴峽より初めて字を成す 猿は巫陽を過ぎて始めて腸を断つ （白）</p>

47 『撰集抄』にみられる他書との類似表現

☆18	17	16	15	14
一	四 一	一	一	四 一
七	四 七	七	七	四 七
347	1609 341	341	332	1593 330
○よしや君昔の玉のゆかとてもかゝらん 後は何にかはせん	○宮もわら屋もはてしなき物なれば ○盛衰はうき世のなか、宮もわらやもは てし無……	○せつり、しゆだかはらず、	○春は花の宴を專にし、秋は月の前の興 つきせず侍りき。	○後宮後房のうてなには、三千の美翠の かんざしあざやかに…… ○三千の美翠のかんざし玉冠のかざりあ ざやかにて……
	下			
	764			
○白峰と申ける所に御墓の侍けるにまありて よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん (西行)	△世の中はとてもかくてもおなじこと宮も墓屋もはてし なければ 江談抄第三、今昔物語集二四―二三、俊頼髓腦、新 古今集一八〇、時代不同歌合、うたたねの記、長 門本平家物語二〇、源平盛衰記第八、第一六、第四 四、第四五、第四八、水無瀬の玉藻、謡曲蟬丸	○いふならくならくのそこに入りぬればせちりも修陀も かはらざりけり 俊頼髓腦、袋草紙一一五、保元物語上62頁(一部)、 宝物集九冊本二102、発心集卷五「五七」(二部)、源 平盛衰記智卷第八280頁、十訓抄五一六、沙石集卷 八一三二話、妻鏡171頁(一部)、雨月物語(一部)、 平家女護嶋297頁(一部)、尤之双紙	○春従春遊 夜専夜 白氏文集卷一二「長恨歌」 (保元物語 半井本)	○後宮佳麗三千人 三千寵愛 ^ハ 在三身 ^ニ 白氏文集卷一二「長恨歌」

22	21	20	19	
一	一	一	九 二	一
八	八	八	二 四	八
432	432	431	5197 689	403
○かれ野にさせるさゝがにいとかきみだして(そことも見え侍らぬ)	○そこはかと見えわかず筆の立所も…… そことも見え侍らぬ……	○すゞろに泪のもれ出て……	○清きながれにすゞぎてし衣の色を又は けがさし ○又はけがさしなど云衣の色は…… ○又はけがさしの玄寶僧都……	
			下	
			612	
○たえはつる物とは見つささがにのいとをたのめる心 ほそさよ 後撰集卷九 509	○なにとなくおつるなみだにまかすればそことも見えぬ ふでのあとかな (俊成)	○ながむればすずろにおつるなみだかななる時ぞ秋 のゆふぐれ (入道前太政大臣) 続古今集四 367	△三輪川の清き流れにすゞぎてし我が名をさらにまたや けがさむ 江談抄第一、袋草紙一一六(巻四)、古事談卷三二(一) ○三、発心集卷一一一話、続古今集卷八 801	山家集下 1355 東関紀行 長門本平家物語 西行物語 (雨月物語 白峯 沙石集五末九 250頁 保元物語下巻 源平盛衰記第八 古事談卷五(三八八) 椿説弓張月後篇卷四)
○ささがにのすがくあさちのすゑごとにみだれてぬける 白露の玉(藤原長能) 後拾遺集四 306	○みればまづそこはかとなくなげかれてなみだおちそふ ふでのあとかな 続古今集一三 1208 1209			
○ささがにの糸かきたえし夕より袖にかかるは涙なりけり(前中納言基成)				

49 『撰集抄』にみられる他書との類似表現

26	25	24	23
三 一	一	一	一
九 八	八	八	八
1314 440	439	438	434
<p>○よ所になしても問たくこぬ人を ○人も問こぬたかまの山の峯の白雲に 第九話最初「過にしころ、紀伊国の方 にまかりて侍りしに、かつらぎ山の麓 に……」とある。</p>	<p>○夕暮は物思ふ事のますかと</p>	<p>○竹の葉にあられふるなりさらと</p>	<p>○とにかくにくもでに物を思つゝ……</p>
下			
409			
<p>△よそにのみ見てややみなむ葛城のたかまの山の峯の白 雲 俊頼髓脳卷上 新古今集一一990 二八要抄「恋一」 謡曲「雲雀山」「小袖曾我」「花筐」「谷行」「花月」 ○袖のうへにたれゆゑ月はやどるぞとよそになしても人 のとへか 新古今集一二恋二1139、自讃歌、続歌仙落書 (藤原秀能)</p>	<p>○ゆふぐれにもの思ふことはまさるやとわれならざらむ 人にとはばや(和泉式部) 詞花集八恋下249</p>	<p>○たけの葉にあられふるなりさらさらにひとりはぬべき 心こそせね 詞花集八恋下254、二八要抄「恋四」 宴曲「忍恋」 (和泉式部)</p>	<p>○恋せんとなれるみかはのやつ橋のくもでに物をおもふ 比かな 古今六帖二1259、袖中抄第一八、海道記、平家物語 一〇、源平盛衰記第三九、続古今集一一1044、二八要 抄恋五、</p>

新拾遺集二三1138
「細小蟹」については、山家集下1514・1552にも出。

31	☆ 30	29	28	27	
六 二	二	七 一	一	一	
二 二	一	一 八 四	八	八	
2556 566	506	3798 459	441	440	
○世の中はうきふししげきくれ竹のなど いろかへてみどりなるらん ○月日はくれ竹のすぎぬる世々の	○つゝめどもかくれぬものはなつむしの 身よりあまれるおもひなりけり	○あさまのたけの烟にくらされて ○あさまのたけには煙のみ心ほそく立登 るありさま……	○かけひの水のたえくになり行底にか げみえて、心細さの音を聞にも……	こぬ人を恨はてぬ物ゆへに	
下	上				
434	191				
○世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしことに驚ぞ 風につれなき物語、謡曲「藤戸」「竹雪」 古今六帖六1122（しぐれする）、新古今集六576、	△時雨ふるおとはすれども呉竹のなどよとゝもに色もか はらぬ 古来風躰抄下 今物語四 悦目抄 春日権現験記第八卷 十訓抄一〇—四二 近代秀歌 詠歌一体 瑩玉集	○信濃なる浅間の嶽にたつ煙をちこち人の見やはとがめ ぬ 伊勢物語八 新古今集一〇903 顯昭陳状 謡曲「杜若」「鉢木」	○おもひやれかけひのみづのたえだえになりゆくほどの こころほそさを 詞花集八恋下258、後葉和歌集一四391 （高階實十行朝臣女）	○こぬ人をうらみもはてじちぎりおきしそのことのはも なさけならずや 詞花集八恋下248	○葛城や高間の山の桜花雲井のよそに見てや過なん（顯 輔） 近代秀歌12

51 『撰集抄』にみられる他書との類似表現

36	35	34	33	32
四 二 二	五 二 二	二	九 二	六 二
五 八 四	一 八 四	四	六 三	二 三
1676 907 694	1874 920 692	688	4900 635	2513 633
<p>○骨をばうづむとも名をば埋まじと……</p> <p>○名をばうづまじとのみこそ思ひあひ……</p> <p>○しばしは名をばうづまねども……</p>	<p>○山田守僧都のいにしへは……</p> <p>○山田守玄資僧都の……</p> <p>○山田をもるわぎ……</p>	<p>○とをつ国の清山水の流をもとめて物さはがしき君が代にはすまぬまさり</p>	<p>○うづらと成て泣をらん</p> <p>○うづらひめむすになく</p>	<p>○空をかけらばつばさをならふる鳥となり、地にすまは枝を連る身とならむ……</p> <p>○天にかけらば、比翼の鳥たらん。地にすまは連理の枝とならん……</p>
下				
471				
<p>△遺文三十軸 軸々に金玉の声あり竜門原上の土、骨を埋んで名を埋まず 故元少尹後集に題す (白)</p> <p>白氏文集卷五一、宝物集九冊本一28、閑居友上二二、十訓抄第五 沙石集</p>	<p>○やまだもるそほづの身こそあはれなれあきはてぬればとふ人もなし</p> <p>続古今集一七雑上1608、源平盛衰記卷七、古事談卷三、発心集卷一、兼載雑談、新百人一首、謡曲「三輪」</p>	<p>○外国ハ山水清シ事多キ君カ都ヘ不レ住マサレリ</p> <p>江談抄第一、古今著聞集卷五(一四三)、閑居友上三71頁</p>	<p>○野とならば鶉となりて鳴きをらんかりにだにやは君は来ざらむ</p> <p>伊勢物語一二三、古今集一八雑下972、古今六帖二1191、千五百番歌合卷一七</p>	<p>なく</p> <p>古今集一八958</p> <p>○在天願作比翼鳥 在地願連理枝</p> <p>白氏文集卷一二 長恨歌</p>

40	39	38	37	
二	二	六	二	
七	五	二	四	
854	763	3232	717	
○片岡山のわび人の機もうへて臥ていま そかりける事	○月を詠むる友忽後に零落し、花にたづ さふる族ら空風に誘はれて跡なく成ぬ る世間に……	○清見が関 (六―一 3232も参照) ○むねの煙は、富士のたかねにまがひ、 袖の露はきよみがたのはやき浪によそ へて、	○ふじの山辺は時しらぬかのこまだらの 雪残り	
	下			
	745			
○しなてるやかたをか山にいひにうゑてふせるたび人あ はれおやなし 拾遺集二〇1350 (源氏物語朝顔) 源氏物語奥入 (千載集序) 古来風牀抄上下、 今昔物語集卷一一一話	△金谷に花に酔うし地 花春毎に匂うて主帰らず 南桜に月を嘲つし人 月秋と期して身何ちにか去んじ 本朝文粹卷一四、 (菅三品)	○むねはふじそではきよみがせきなれやけぶりもなみも たたぬひぞなき(平祐季) 詞花集七恋上213 玄々集 古来風牀抄下 俊頼髓脳 千五百番歌合卷一八、 平家物語卷九 二八要抄 よるのつる 東関紀行 謡曲「伏木曾我」	○時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿のこまだらに雪の 降るらん 伊勢物語九 古今六帖第一687 業平集 今昔物語集二四―三五 新古今集一七雑中1616 千五百番歌合卷一七 顯昭陳状、都のつと、河越記、宴曲、舞の本謡曲	徒然草三八 女郎花物語卷下 太平記卷四 一宮并妙法院二品親王御事

45	44	43	☆42	☆41	
三	九 二	五 五 五	二	二	
一	九 八	五 四 八	八	八	
971	5118 942	2003 1974 921	901	899	
○まつが根のきしうつ浪にあらはれてこゝすみよしとおもふばかりぞ	○衆罪は草露のごとくして、恵日は是をきやす事はやし ○衆罪は露として草むらごとにおくといへ共、恵日はこれをきやすことはやし	○山田守玄賓僧都のひたの声に驚むらすめまでも侍りけん。をのが羽風になるこならして心とさはぐ鳥…… ○をのが心をさはがして…… ○なることをばおのが羽風にゆるがして心とさはぐむら雀かな	○うらむなるよかげみえがたの夕月夜おぼろけならぬ雲ままつ身を	○水のおもにふるしら雪のかたもなくきえやしなまし人のつらさに	
○住吉の松が根あらふ波のおとをこすゑに懸くる沖つ潮風	○罪はしも露ものこらず消えぬらんがき夜すがらくゆる思ひに（寛普法師） 金葉集二度本異本歌708、長秋詠藻（参考、出御集）	○なることをばおのが羽風にゆるがして心とさわぐむら雀かな 沙石集卷五末一八、鴉鷺合戦物語（閑居友上二三 一部分）	○うらむなよかげ見えがたきゆふづくよおぼろけならぬくもままつ身ぞ（一宮紀伊） 金葉集二度本八恋下483、祐子内親王家紀伊集二八要抄恋三	○水のおもにふるしらゆきのかたもなくきえやしなまし人のつらさに （藤原成通朝臣） 金葉集二度本八恋下452（三奏本449）、今鏡六ふちなみの下	俊頼髓腦、 和歌秘伝抄、 沙石集卷五末一〇、 野守鏡下

☆49	48	47	46	
三	三	三	五 四 三	
三	二	一	九 七 一	
1609	1053	1002	2194 1800 1001	
○つきもせずきを見る目のかなしさに あまとなりてもそでぞかはかぬ	○岸の額に根を離れたる草、江の辺につ ながざる船	○心なき身にも哀に覺るを……	○人もなききの浜風に…… ○人もなききのほとりに…… ○人もなききの浦に……	
	下			
	790			
(遊女考「竹岡尼」、色道大鏡卷六、第三)	△身を観ずれば岸の額に根を離れたる草 命を論ずれば 江の頭に繋がる舟 (羅維) 三宝絵序(現代思潮社 古典文庫上33頁)、宝物集九 冊本第八冊古典文庫374頁)、謡曲「大原御幸」、 常盤姫物語(群書類従620頁)	○心なき身にも哀はしられけり鳴たつ沢の秋の夕暮 山家集上470、新古今集362、御裳濯川歌合、 今物語四二、井蛙抄、愚秘抄、西行物語	○わがごとく我を尋ねばあまをぶね人もなききの跡とこ たへよ(行尊) 新古今集917 ○伊勢の海人もなきさをながめやりて君来たらばと思ふ なにごと 山家集(存疑、全書220)	山家集1054、続拾遺集二〇1438 ○おきつかぜふきにけらしなすみよしの松のしづえをあ らふしらなみ(経信) 後拾遺集一八1063 ○すみよしの松がねあらふしきなみにいのるみかげは千 世もかはらじ(定家) 続後撰集九552

52	☆51	50
三	三	三
七	六	四
1225	1190	1128
○弥々くらきよりくらきにまどひて、	○あけぬなりかもの川原に千どりなくけ ふもはかなくくれむとぞする すらん(嵯峨本)	○大隠は朝市にあり
拾遺集二〇1342 和泉式部集第一 後六々撰、俊頼髓腦 宝物集二巻本 無名抄 後十五番歌合 無名草子 近來風体抄 女房三十六人歌合 西行上人談抄 宴曲「袖志浦恋」 謡曲「鶴」「俊寛」 その他、続千載705、新千載869、新拾遺1458	○くらきよりくらきになはやまはまし衣のうらのたま なかりせば 統後撰集一〇591 (権大僧都源信) ○暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照せ山のはの月 (雅致女式部) ○あけぬなり賀茂の川瀬に千鳥なくけふもはかなく暮れ むとすらむ(円松) 後拾遺集一七1014、古来風体抄下	○小隠隠「陵藪」大隠隠「朝市」(王康璽) 文選 反招隠 ○大隠住朝市 小隠入丘樊 白氏文集卷五二中隠 池亭記、発心集卷二(一五)、雑談集

57	☆56	55	☆54	53
四	四	四	四	九七三
四	四	二	二	三二三
1560	1552	1429	1393	4764 ³⁷⁶⁹ _{の1} 1330
○藜蘭茂成て風に破れ……	○とへかしなoki所なき露の身はしばし もことの葉にやかくと	○河風さむし衣かせ山とよみける泉川の ……	○身にまさる物なかりけりみどり子はや らんかたなくなしけれども	○み山おろしに夢覚て…… ○(深山おろし) ○み山下に夢覚てなみだもよほす滝の音
上				
287				
△扶桑あに影無からんや 浮雲掩うて忽ちに昏し 叢蘭 あに芳しからざらんや 秋風吹いて先づ敗る 本朝文粹一「栗裘賦」 栗裘賦 中書王	○とへかしなくよもあらじつゆのみをしばしもことの はにやかかると 後拾遺集一六1006 今昔物語集卷二四一五○話	○都出でて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山 古今集九408 新撰和歌三188 古今六帖五3325 源平盛衰記卷三五	○おほちにこそすてはべりけるおしくくみにかきつけ はべりける ○身にまさるものなかりけりみどりこはやらむかたなく かなしけれども 金葉集二度本卷一〇611(三奏本603)、宝物集九冊本 三289	○吹きまよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音か な 源氏物語若紫196頁、(光源氏) 風葉集一九 東関紀行 増鏡第五 長門本平家物語第一八 源平盛衰記 裳卷第四五

☆ 62	61	60	59	58
八 四	四	六 四	四	六 四
三 四	四	二 四	四	一 四
3356 3959 1619	1619	2604 1618	1612	2494 1563
○新柳風にかみけづりて、旧苔浪ひげをあらふ…… ○気霧風櫛新柳髪 水消波洗旧苔鬚	○田地に永消て芦錐短……	○南枝北枝の梅開落異にして…… ○南枝北枝の梅のひらけ整のおざるに、かつちりて……	○出る息引ききを待ぬ	○右は海漫々としてきはもなし。左は清淵河岸高くして…… ○海漫々として、雲の浪、煙のなみ、いとふかき所に三の神山あり。不死の薬おほくありとて、方士をして、年々／＼に薬をとりにつかはしし秦皇漢武もむかし語になり……
上	上	上		
13	9	11		
△気霧れては風新柳の髪を梳る 水消えては浪旧苔の鬚を洗ふ 江談抄四、十訓抄一〇、神道集九、東斎隨筆三五、北野縁起上、狂言岡大夫	△水田地に消えて蘆錐短し 春枝条に入って柳眼低れり (元) 元白唱和集	△東岸西岸の柳 遅速同じからず 南枝北枝の梅 開落已に異なり 春の生ることは地形に逐ふ (保胤) 本朝文粹八、白氏六帖九十九、朗詠要集、朗詠九十首抄、魚山朗詠抄、謡曲 東岸居士	○いづるいきのいるをまつまもかたきよをおもひしるらんそではいかにぞ 詞花集一〇403 ○いなづまのてらすほどにはいづるいきのまつまもかはらざりけり 続詞花集一〇459	○海漫漫直下無底旁無、辺雲濤煙浪最深処人伝中有三種山山上多生不死薬服之羽化為天山 秦皇漢武此語方士年年采薬去 白氏文集卷三「海漫漫」

67	66	65	☆64	63
五	四	四	七 四	四
一	八	七	八 六	五
1869	1854	1809	3571 1695 1693	1637 1635
○山深く思入て常なき色を風に詠……	○人の心の浮雲にそらがくれする月とこそ、常在靈鷲山の心をば歌にもよみたれ。	○あすか川のふちは瀬に成、せは又ふちと成。	○みなれざほとらでぞくだすたかせ川月のひかりのさすにまかせて ○のぼるもくだるも高瀬舟にみなれ棹さしわびても、	○古墓何の世の人ぞ、性と名とを不知、年々春の草のみしげし。 ○旧世の墓其姓名を不知。年のうつる毎に、春の草のみ生て、古き率都婆霧くちて傾き立る様……
○おく山にひとりうき世はさとりにつねなきいろを風にながめて 新古今集二〇1935	○よのなかの人のこころのうき雲にそらがくれするありあけの月 詞花集415 常に靈鷲山のころをよめる 家に百首歌よみ侍りける時、十界の心をよみ侍りけるに、縁覚の心を （登蓮法師）	○世中はなにかつねなるあすがはきのふのふちぞけふはせになる 古今集一八933、枕草子五一、榮花物語一四、東関紀行、徒然草、謡曲 飛鳥川	○みなれざをとらでぞくだすたかせぶね月のひかりのさすにまかせて 後拾遺集一五835、和歌一字抄、古今選 四雑 （閑居友上一三二） （源師賢）	古墓何代人不知 姓与名化作路傍土 年年春草生感 彼忽自悟今我何當嘗 白氏文集卷二続古詩十首 他に続本朝往生伝（四）、袋草紙（九二）、宝物集二、古事談第一（四七）、発心集五十八、十訓抄六一四、古今著聞集卷四（二三六）、東斎隨筆（二五）

71	70	69	68
五	六 五	五	六 五
一〇	一一 一〇	四	二 四
2226	3284 2219	1967	2542 1966
<p>○月の秋は広沢の池のほとりにたたずみて、浪にしづめる月をも見、</p>	<p>○芭蕉の破易、蜉蝣のあだなるとは、 芭蕉の上にかける蜉蝣、風になびける 芭蕉やさゝる立てややぶれんとする、蜉蝣やさきにきえんとする</p>	<p>○山郭公の里なれしより</p>	<p>○しづがかきねに卯華の咲そめ ○かき根の卯の花の風にさそはれ</p>
<p>○宿しもつ月の光のをふしさいかに言へども広沢の池 山家集上 321 ○広沢の池にはしづむ月影のおとはの山に立ちのぼるかな（家房） 夫木抄 二三 10846 六百番歌合、広沢池眺望</p>	<p>○未及暮景 蜉蝣之世無常 不待秋風 芭蕉之命易破 新撰朗詠集下 739 ○風吹けば徒に破れ行芭蕉葉のあればと身をも頼むべきかは 山家集中 1028</p>	<p>○あしひきの山郭公さとなれてたそかれ時になのりすらしも（大中臣輔親） 拾遺集一六 1076、拾遺抄九 405 玄玄集 105、後十五番歌合、提中納言物語 今昔物語集卷二四―五三話、逢坂越えぬ權中納言、後六六集</p>	<p>秋篠月清集、後京極自歌合 十題百首和歌 ○あたらしやしづがかきねをかりそめにへだつばかりのやへのうのはな 夫木和歌抄七 2459 参考、後撰 148 151 152・拾遺 1071 1072 90 93・後拾遺 132、新古今 200</p>

77	76	☆ 75	74	☆ 73	72	
五	五	八 五	六 五	五	九 五	
一四	一四	二五 一四	三 一四	二	八 二	
2344	2343	4311 4307 2342	2678 2339	2269 2265	4384 2240	
葉 ○入唐して仲丸がふりさけ見けんことの	○尾華くず花露散て	○萩の下露 ○萩はなをゆふまぐれこそたゞならね ○萩の上かぜはぎのした露	○小篠原玉さゝの上には玉あられつもあり ひろはむ事も片岡の…… ○とらんとすればきゆる玉霞をみて	○しづがふせ屋をふきぞわづらふ ○月はもれ時雨たまれと思ふには	○家は南北の岸さしはさみて、心は旅人のしばしのなさを思ふ様、さもはかなきわざにて…… ○家は南北の河岸にさしはさみ、心は旅人のゆききの船を思ふ遊女の有様	
上		上				
258		229				
△あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも（安部仲丸）	○露しげき尾花くず花吹く風に玉ぬきちらす秋の夕暮 （源師光） 新統古今集四15、万代和歌集四919	△秋はなほ夕まぐれこそたゞならね萩の上風萩の下露 （義孝少将） 義孝集 栄花物語卷七（下句のみ） 平家物語一〇藤戸、百人一首一タ話	○はかなくもひろへばきゆるたまささのうへにみだれて ふるあられかな（土御門院小宰相） 続古今集卷六641	○月はもれ雨はたまれと思ふには 中務少輔実重 葺きぞわづらふ賤がささやを 三条の内のおとど 今鏡第八みこたち、花のあるじ、謡曲「雨月」	○心には見ぬむかしこそうかびけれ月にながむるひろさはの池（後京極摂政） 夫木抄二三5197 ○家夾江河南北岸 心通上下往来船（以言） 新撰朗詠集卷下672 （和漢朗詠集季吟注では源順作とする）	

☆ 79	☆ 78	
五	五	
一四	一四	
2360	2357	
○津の国の難波の春は夢なれや蘆のかれ 葉に風わたるなり	○山里にうき世いとはん友もがなくやし くすぎしむかし語らむ	
○つぐにの難波の春はゆめなれやあしのかれはに風わ たるなり（西行） 新古今集六625、 自讃歌、 三五記、 愚見抄、 ささめこと上、 玄玉和歌集七723、 謡曲「芦刈」 御裳濯川歌合 桐火桶、 愚秘抄、 師説自見集上、 耕雲口伝、 太平記巻第二六	○山ざとにうき世いとはむ友もがなくやしくすぎし昔か たらむ 新古今集一七1659、自讃歌、三五記 西行物語、 愚見抄、定家十体 （西行）	古今集九406 古今和歌六帖一252 金玉集51、 新撰髓脳、 古来風躰抄下、 宝物集九冊本第三220、 柿本朝臣人麿勘文 小倉百人一首、 綺語抄上、 謡曲「野守」「谷行」 ○ふりさけし人の心ぞ知られぬるこよひ三笠の月を眺め て 山家集上407 土左日記 新撰和歌三182 今昔物語集二四―四四、 江談抄三、 水鏡 巻下、 西公談抄、 釣舟、古来説話集上45、 井蛙抄第一、 連珠合璧集上

83	82	☆81	80
六	六	六	六
二	二	二	二
2614	2587	2567	2532
○盧橘に香をとめて啼子規をまちて……	○栄公が三楽も……	○かはらんとおもふ命はおしからでさてもわかれん事ぞかなしき	○しでの山路の鳥のねにさそはれ給にけり
上	下		
174	661	484	
<p>ほととぎす花橘の香をとめてなくはむかしの人やこひしき</p> <p>新古今集三244、 平家物語灌頂卷、 長門本平家物語卷二〇、 源平盛衰記緋卷四四</p>	<p>△もし栄期をして兼ねて酔ひを解らしめましかば 四楽とぞ言つてべからまし三とは言はざらまし (白)</p> <p>白氏文集卷五六「琴酒」</p> <p>△栄啓期が三楽を歌ひし いまだ常楽の門に到らず 皇甫謚が百王を述べたる なほ法王の道には暗かりき (江)</p> <p>本朝文粹一〇詩序三</p>	<p>○かはらおといのちをはをしからでさてもわかれんことぞかなしき</p> <p>詞花集一〇雑下362 赤染衛門集 (赤染衛門)</p> <p>玄々集139、 後六々撰、</p> <p>古来風体抄下、 今昔物語集二四一五一</p> <p>袋草紙卷四、 沙石集五末一</p> <p>十訓抄一〇一四 古今著聞集卷五、卷八</p>	<p>○この世にて語らひおかんほととぎす死出の山路のしるべともなれ</p> <p>山家集中70、新後撰集一九</p> <p>○ほととぎすなくこゑきかばまづとはんしでのやまぢを人やこえしと (道命法師)</p> <p>続古今集一六1416</p>

87	86	85	84	
六	六	六	六	
三	三	三	三	
2697	2696	2695	2691 2689	
○誰にとはまし草の原、色かはる露をば 袖にをきまよひても、霜かれはてゝし 野辺の……	○面かげも契しもわすれずながらうつゝ とおおぼえねば、夢かとわきかねても ……	○峰にわかるゝよこ雲のそらを	○九夏三伏のあつきにも…… ○玄冬素雪の寒にも……	
			下	
			424	
①尋ねべき草の原さへ霜がれて誰にとはまし道芝の露 (狭衣大将) 狭衣物語巻二上 源氏狭衣歌合、	○夢かとお見しおもかげも契りしも忘れずながらうつゝ ならねば 新古今集一五1391 影供歌合、 俊成卿女集、 自讃歌、 新三十六人撰 桐火桶、 新時代不同歌合上、 二八要抄、 新百人一首、 続歌仙落書、 徹書記物語、 女房三十六人歌合、 宴曲「竜田河恋」	○春の夜の夢の浮橋とだえして嶺に別るる横雲の空 (藤原定家) 新古今集一38、 拾遺愚草中、 自讃歌、 定家卿百番自歌合、 ささめこと上、 老のくりごと、 正徹物語上、 耕雲口伝、 連珠合璧集上、 宴曲「曉別」「夢」 謡曲「高野詣」、	△九夏三伏の暑月に 竹錯午の風を含み 玄冬素雪の寒朝に 松君子の徳を彰す 本朝文粹巻一、平家物語灌頂巻、朗詠九十首抄 (順)	源平盛衰記緋巻四八、宴曲「郭公」、謡曲「草薙」

☆91	☆90	☆89	88	
六	六	六	六	
四	四	三	三	
2749 2747	2741 2737	2709	2698	
○舟のうち浪のしたにぞおひにける ○あまのしわざもいとまな世や	○難波人にかなる江にかくちはてん ○あふことなみに身をしづめつゝ	○胡馬北風に嘶へ、越鳥南枝に巢くふ	○色かはる露をば袖にをきまよひて霜か れはてゝし帰辺のうさ	
○船のうち波の下にぞ老いにけるあまのしわざも暇なの 世や 新古今集一八1704、 千五百番歌合卷一九、 秋篠月清集二892、	○なには人いかなるえにかくちはてむあふことなみに 身をつくしつゝ 新古今集一一1077、秋篠月清集四1456、 影供歌合 (藤原良経)	○胡馬依 ^ニ 北風 ^一 、越鳥巢 ^ニ 南枝 ^一 、 文選古詩十九首のうちの第一首、 玉台新詠卷一(注5)	○いろかはる露をば袖におきまよひうらがれて行くのべ の秋風 新古今集五516、自讃歌、新三十六人撰、美濃の家づ と (俊成女)	正徹物語下、 風葉和歌集序、六、 石清水物語上、 愚問賢注、 宴曲「無常」 謡曲「錦木」「綾鼓」「柏崎」 ②霜がれはそこともみえぬ草の原誰に問はまし秋のなご りを (俊成女) 新古今集六617、自讃歌、新三十六人撰、正徹物語、 美濃の家づと

☆96	95	94	93	☆92
六	六	六	六	六
八	七	五	五	五
2955	2926	2829	2828	2821
○すゝきしげる秋の野風のいかならんよ る啼虫の声のさむけさ	○時雨俄にさえとをり……はれ行雲のす ゑの里人は月なをまつらん物と……	○かへるさの月の光もおぼろにみえて	○かきくらさるゝまゝにかへるさの月の 光もおぼろにみえて	○なれくゝて見しは名残の春ぞともなど しら川の花のした風
○すゝきちる秋の野風のいかならんよるなく虫の声のさ びしき 土御門院御百首	○月をなほ待つらむものか村雨のはれゆく雲の末の里人 (宮内卿) 新古今集四423 自讃歌 統歌仙落書 三五記 新三十六人撰	○帰るさの物とや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の 月 新古今集一三1206 拾遺愚草上 自讃歌 新三十六人撰 無名抄卷上 統歌仙落書 二八要抄 なぐさめ草	○いにしへをこふるなみだにくらされておぼろにみゆる あきのよの月 三条太政大臣身まかりてのち月をみてよめる 詞花集一〇392 (公任)	○なれなれて見しはなごりの春ぞともなどしら河の花の 下かげ 新古今集一六1456 自讃歌 新三十六人撰 統歌仙落書 太平記卷四、 閑田耕筆卷四

☆103	☆102	☆101	☆100	☆99	☆98	☆97
六	六	六	六	六	六	六
二二	一一	八	八	八	八	八
3261	3202	2970	2967	2964	2961	2958
○露をだにいまはかたみのふぢごろもあ だにも袖をふくあらしかな	○武蔵野は行 ^{ゆけ} ども秋のはてぞなきいかな る風かすゑにふくらんと……	○萩か花うつろふ庭の秋風にした葉もま たで露は散つゝ	○をみなへしうへし籬の秋の色はなをし ろたへの露ぞかはらぬ	○夕さればまがきの萩にふく風の目に見 ぬ秋をしる涙かな	○露のぬきあたにおるてふふぢばかまあ き風またで誰にかさまし	○山かげや暮ぬとおもへばかるかやのし たをく露もまだき色かな
○露をだに今はかたみの藤衣あたにも袖を吹く風かな (藤原秀能)	○むさしのやゆけども秋のはてぞなきいかなる風かすゑ に吹くらむ 新古今集四378、 三五記、 新百人一首、 新三十六人撰、 謡曲「東北」「隅田川」 自讃歌、 (源通光)	○萩か花うつろふ庭の秋風に下葉もまたで露はちりつ ゝ 土御門院御百首、続拾遺集四秋歌上248	○女郎花うゑし籬の秋の色は猶しろたへの露ぞかはら ぬ 土御門院御百首	○夕ぐれは籬の萩に吹風の目にみぬ秋をしる涙かな 土御門院御百首 ○ゆふさればまがきのをきをふくかぜのめに見ぬあきを しるなみだかな 続古今集四秋歌上303 (土御門院御歌)	○露のぬきあたにおるてふ蘭秋風またで誰にかさまし 土御門院御百首、続古今集四秋歌上351	○山かげや暮ぬと思へばかるかやの下置露のまたき色な し 土御門院御百首

109	108	107	106	105	☆104	
七 一 四	七 一 三	七 一 〇	七 一 〇	七 二	七 二	
3797	3788	3664	3664	3394	3386 3384	
○甲斐の白根には雪つもり	○鶴千里に飛、なを地を離れず、鷺雲に かける、いまだ天の外にあらざれば、	○太山の嵐	○ならのはまではこちたき太山の嵐、を 花のすゑによはり	○なにはの事か法ならぬ	○なきてぞかへる春の明ぼの 又もこん秋をたのむのかりだにも	
○いづかたとかひのしらねはしらねどもゆきふるごと におもひこそやれ 後拾遺集六404 (紀伊式部)	○鶴飛千里未離雲 菅家文章115 江談抄第五(注)、十訓抄四(四一〇) 東斎隨筆	○とやままでみやまのあらしわけすぎてまささきのかづら 秋風ぞふく 夫木抄五 6083 (後鳥羽院宮内卿)	○とやまなるならのはまでははげしくてをばながすゑに よわる秋かぜ 続古今集四 345	○つのくにのなにはのことかのりならぬあそびたはぶれ までとこそきけ 後拾遺集二〇1197、悦目抄、東斎隨筆五九 (遊女宮木)	○又もこむ秋をたのむのかりだにもなきてぞかへる春の あけぼの 新古今集一三1186 歌林良材集上 秋篠月清集一、 (藤原良経)	新古今集八789、 自讃歌、 統歌仙落書、 時代不同歌合、 新三十六人撰、 兼載雑談、 梨本集三下 釣舟、

☆ 114	☆ 113	☆ 112	番号	111	110
八	八	八	巻	七	七
四	二	一	話	一四	一四
79	77	76	番号 通号	3809	3803
3973	3942 3940	3917	行 数		
○隴山雲暗し 李將軍之在家 潁水浪閑 蔡征虜之未仕	○三千世界眼前尽 ○十二因縁心裏空	○紫塵嬾蔵人挙手 碧玉寒葦錐脱囊	松 平 本 文	○佐野の野辺には袖はらふべきかげもなしとかや	○木曾のかけ橋ふみ見しは
下	下	上	巻		
685	583	12	番号		
△隴山雲暗し 李將軍が家に在る 潁水浪閑かなり 蔡征虜がいまだ仕へざる(菅三品) 本朝文粹五、江談抄六、十訓抄一〇、古今著聞集四 (一一七)(一部)	△三千世界は眼の前に尽きぬ 十二因縁は心の裏に空し (都) 江談抄四、袋草紙一一二、十訓抄一〇、古今著聞集 四(一一三)、源平盛衰記二八、延慶本平家物語、 太平記二七、曾我物語、謡曲 鶯、三笑、休源抄 一〇、拾遺愚草難歌二百首注	△紫塵の嫩き蔵は人手を挙る 碧玉の寒き蘆は錐囊を脱 す (野) 江談抄四、朗詠鈔 (参考 史記卷七六)	和漢朗詠集(△印)そのほか 新古今集六671 拾遺愚草上 自讃歌序および十首のうち、 定家卿百番自歌合 続歌仙落書 謡曲「鉢木」「船橋」	○こまとめて袖うちはらふかげもなしきのわたりの雪 の夕暮 続拾遺集九700	○分けくらすぎそのかけはしたえだえに行末ふかきみね の白雲 続拾遺集九700

☆119	118	☆ 117	☆ 116	☆ 115
八	八	八	八	八
七	六	六	五	五
82	81	81	80	80
4013	4003	4000	3991	3981
○官途自此心長別 世事従今口不言	○文詞	○前途程遠 馳思於雁山之暮雲 後会期遙 霑纓於鴻臚之曉淚	○わたの原やそ嶋かけてこき出ぬと 人には告げよ海人のつりふね	○万里東来何再日 一生西望是長襟
下	下	下	下	下
618	667	632	648	635
△官途は此より心に長く別れたり 世事は今より口にも言はじ 白氏文集一六、高倉院昇遐記 (白)	△東平蒼が雅量 寧ろ漢皇褒貴の無双の弟にあらずや 桂陽鏢が文詞 またこれ斉帝寵愛の第八の子なり(第八親王書始 菅三品) 「文詞」の項を立てる	△前途程遠し 思ひを雁山の暮の雲に馳す 後会期遙かなり 纓を鴻臚の曉の涙に霑す(江相公) 本朝文粹九、江談抄六、古今著聞集四(一一二)、平家物語卷七(前半のみ)、源平盛衰記三二、太平記二二、	△わたのはら八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよあまのつり舟 古今集九407 金玉集 56 新撰和歌三186 新撰髓腦 今昔物語集二四―四五、世継物語、宝物集二164、 水鏡卷下仁明天皇条、古来風躰抄下、 時代不同歌合 神中抄第一九 小倉百人一首 太平記卷第四 井蛙抄第一 筑紫道記 謡曲「竜虎」	△万里に東に來らむことは何れの再日ぞ 一生西を望まむことはこれ長き襟ひなり 江談抄四 (野)

☆125	☆124	☆123	☆122	☆121	☆120
八	八	八	八	八	八
一一	一〇	九	八	八	八
86	85	84	83	83	83
4096	4078	4068	4039	4034	4026
○世の中にあらましかばとおもふ人 なきはおほくもなりけるかな	○うれしさをむかしは袖につゝみけ り今夜は身にもあまりぬるかな	○紫宸殿之皇居 七廻書賢聖之障子 大嘗会之宝祚 両度黠画図之屏風 視三朝之徳化 身猶雖沈本朝 隔万里之波濤 名是得播唐国	○仁流秋津州之外 惠茂筑波山之影	○離家三四月 落涙百千行 万事皆如夢 時々仰彼蒼	○我為遷客汝來賓 共是簫々旅漂身 敲枕思量歸去日 我知何歳汝明春
下	下		下		
750	773		658		
△世の中にあらましかばとおもふ人 なきはおほくもなりけるかな 拾遺集二〇1299、 拾遺抄一〇571	△うれしさを昔は袖につゝみけりこよひは身にもあまり ぬるかな 源氏物語奥入明石、新勅撰集七456、 百人一首一夕話卷五	○紫宸殿之皇居 七廻書 賢聖之障子 大嘗会之宝祚 両度黠画図之屏風……視三朝之徳化 身猶雖沈本朝 本朝 隔万里之波濤 名是得播唐国 本朝文粹卷六	△仁秋津洲の外に流れ 惠筑波山の陰よりも茂し 淵変じて瀬となる声 寂々として口を閉づ 沙長じて巖となる頰 洋々として耳に満てり (和歌序 淑望) 古今集序、本朝文粹卷一一、江談抄六、沙石集一〇 末一一、神道集九一四九、北野縁起上	○同上 菅家後集476、江談抄卷四、神道集九(四九)、北野 縁起上、天神講式	○我為遷客汝來賓 共是簫々旅漂身 敲枕思量歸去日 我知何歳汝明春 菅家後集480、神道集九(四九)、北野縁起上

71 『撰集抄』にみられる他書との類似表現

128	☆127	126	
八	八	八	
一一	一一	一一	
87	87	87	
4114	4110	4105	
○月やどれとはぬれねども心有ける 袂哉	○しら浪のよするなぎさに世をすこ すあまの子なればやどもさだめす	○須磨の浦に遷て、もしほたれつゝ うらづたひしありき侍りけるに…	
	下		
	722		
○こころあるをじまの海人のたもとかな月やどれとはぬ れぬものから (宮内卿)	△白波のよするなぎさによをす海人の子なればやど もさだめす 新古今集一八1703、 (狭衣物語卷一上) 連珠合璧集下 謡曲「胡蝶」「半蒔」 (三国伝記卷一―二九(類似表現)) 源氏物語夕顔 風葉和歌集、 曲舞「西国下」 (海人詠)	○わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつゝわ ぶとこたへよ 古今集一八962、 古今和歌六帖三1793、 奥義抄卷七、 桐火桶 近代秀歌 源平盛衰記登卷第七 歌林良材集上 宴曲「名所恋」 新撰和歌三315、 源氏物語「須磨」「蓬生」 時代不同歌合 秀歌大略 保元物語卷三 源平盛衰記賦卷三一 詞林采華抄第四 謡曲「松風」「忠風」「絃上」	為類集 玄々集61 源氏物語玉鬘、 源氏物語奥入 後十五番歌合 宴曲「老後述懐」 公任集 栄花物語卷四、古本説話集上―三六 (狭衣物語卷二下) 宝物集四313、世継物語、 中務内侍日記

☆132	☆ 131	☆130	129	
八	八	八	八	
一五	一四	二三	二二	
90	89	88	87	
415	4140	4125	4114	
○晝梁王苑に入ざられもど、雪よも にみち夜庾公が楼にのぼらねども 月千里をてらす	○かく計へがたくみゆる世の中にう らやましくもすめる月かな	○いづくにか身をばよせまし世の中 に老をいとはぬ人しなれば	○波になみしく袖の上には月をかさ ねてなれし面影	
上	下	下		
374	765	733		
△晝梁王の苑に入れば 雪群山に満てり 夜庾公が楼に登れば 月千里に明らかなり 白賦 文選卷一三、卷一四、江談抄六	△かくばかりへがたくみゆる世の中にうらやましくもす める月かな 拾遺集八 435 高光集 435 三十六歌仙 榮花物語卷一（大系本 50 頁）、宝物集九冊本第四 323 （諸本により初句「しばしだに」） 新時代不同歌合上、謡曲「松風」	△いづくにか身をばよせまし世の中に老をいとはぬ人し なければ 宝物集九冊本第一 16（初句「何方に」） （為頼）	○わが涙もとめて袖にやどれ月ざりとて人のかげは見ね ども 新古今集一四 1273、秋篠月清集二、 千五百番歌合卷一八、自讃歌、 歌林良材集上	新古今集四 399 撰歌合 新三十六人撰 （八雲御抄卷六） 自讃歌 続歌仙落書 女房三十六人歌合

73 『撰集抄』にみられる他書との類似表現

☆137	136	☆135	☆134	133
八	八	八	八	八
一七	一七	一六	一五	一五
92	95	91	90	90
4190	4225	4174	4157	4152
○いまこんとたれたのめけむ秋の夜をあかしかねつゝまつむしのなく	○花に元亮し紅葉に優遊する事隠逸の如くに侍り 元亮の人も侍らねども	○あり明の心ちこそすれさかつきに日かげもそいていでぬとおもへば	○しら／＼しらけたる夜の月影に雪かきわけて梅の花おる	○木ごとに花さく心地していづれを梅とわきがたき
上	上	下	下	上
332	311	490	804	383
△今こむとたれたのめけむ秋の夜をあかしかねつゝまつ虫のなく 〔延喜四―廿二年〕秋東宮保明親王帶刀陣歌合7〔平安朝歌合大成一〕	△樵蘇往反す 枝朱買臣が衣を穿つ 隠逸優遊す 履葛稚仙が葉を踏む （落葉山中に踏む相如） 本朝文粹一〇、江談抄六	△有名のこゝちこそすれ酒盃にひかげもそひていでぬと思へば 拾遺集一七 ¹¹⁴⁸ 、拾遺抄九 ⁴²⁵ 、百人一首一夕話卷之四 （能宣）	△しら／＼しらけたるとし月光に雪かきわけて梅の花をる 類聚証、尤之双紙上、百人一首一夕話卷五	△雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし 古今集六 ³³⁷ 新撰和歌第二 ¹³⁸ 古今和歌六帖一 ⁷³⁶ 友則集、継色紙集冬上 三十六人撰 住吉物語 （狭衣物語卷四中） 悦目抄

☆142	☆141	☆140	☆139	☆138
八 二 〇	八 一 九	八 一 八	八 一 八	八 一 七
95	94	93	93	92
4228	4214	4204	4198	4193
○去年見しに色とかはらず咲にけり 花こそ物はおもはざりけれ	○桜かり雨はふりきぬおなじくはぬ るとも花のかげにやどらん	○あまの河あふぎの飛にきりはれて 空すみわたるかさゝぎのはし	○あまの河川べすゝしきたなばたに 扇のかぜをなほやかさまし	○きりゝすいたくなゝきそ秋の夜 のながきおもひはわれぞまされる
	上	上	上	上
	85	202	201	333
○こぞ見しに色とかはらずさきにけり はなこそ物はおも	△さくらがり雨はふりきぬおなじくは濡るとも花のかげ にかくれむ 拾遺集一50 古今和歌六帖一459 袖中抄第一九 秀歌大略 歌林良材集上 謡曲「籠祇王」「右近」「雲雀山」 後三条院かくれおはしまして又のとしのはるさかりな りける花を見てよめる 左近府生秦兼方	△天の川あふぎのかげにくもはれてそらすみわたるかさ ゝぎの橋 拾遺集一七1089 円融院扇合9、三十人撰98、百人一首一夕話 元輔集(I70・II73) (同前元輔)	△天の川かはべすゝしきたなばたに扇の風をなほや貸さ まし(七夕扇合 中務) 拾遺集一七1088 拾遺抄三98 円融院扇合12、三十人撰127、中務集(I125・II130) 三十六人撰 百人一首一夕話	△きりゝすいたくな鳴きそ秋の夜のながきおもひはわ れぞまされる 古今集四196 古今和歌六帖六3387、 (素性) 桐火桶、 後六々撰

75 『撰集抄』にみられる他書との類似表現

☆145	☆144	143
八	八	八
二	二	二
二	二	〇
97	96	95
4262	4255	4240
○南無薬師あはれみ給へ世の中にあ りわづらふもおなじやまひぞ	○雲のゐるこしのしら山おひにけり おほくの年の雪つもりつゝ	○花こそやどのあるじなりけれ
	下	
	497	
○なもやくしあはれみたまへ世中にありわづらふも同じ 病を 今物語二七 源平盛衰記礼卷一七 やしなひぐさ前編 長門本平家物語卷九 女郎花物語上	△雲のゐるこしの白山老いにけりおほくの年の雪つもり つゝ 拾遺集四249、拾遺抄四159、忠見集(I 15・II 19) 新撰朗詠集上114 新時代不同歌合上 後六々撰 百人一首一夕話卷五 顕昭陳状	○春きてぞ人もとひける山ざとは花こそやどのあるじな りけれ 拾遺集一六1015 公任集 金玉集21 今昔物語集卷二四一三四、 袋草紙五四 今物語四一 古来風輪抄下 後十五番歌合 右衛門督公任) はざりけれ 金葉集二度本九524 (三奏本517) 袋草紙五〇・五四、 宝物集九冊本5、顕昭陳状春中、宇治拾遺物語一 〇、今物語四一、その他、讃岐典侍日記(初句「い にしへに」)

☆150	☆149	☆148	☆147	☆146
八 二 七	八 二 六	八 二 五	八 二 四	八 二 三
102	101	100	99	98
4353	4336	4326	4298	4291
○から衣うつ声きけば月きよみまだ ねぬ人を空にしる哉	○をみなへしおほかる野辺にやどり せばあやなくあだの名をやたつべ き	○萩の葉に風をとづるゝゆふべには はぎのした露おきぞましぬる	○色香をばおもひもいれず梅のはな つねならぬ世によそへてぞみる	○我やどの花みがてらにくる人はち りなん後ぞこひしかるべき
上	上		上	上
351	280		101	124
△から衣揃つこゑきけば月きよみまだねぬ人をそらにし るかな 貫之集 百人一首一夕話卷六 新勅撰集五 323	△をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの 名をやたつべき 寛平御時后宮歌合 88 古今集四 229 新撰和歌一 72 紫式部日記（大系本 445 頁一部） 新撰万葉集上 93 古今和歌六帖六 3663	○萩の葉に風おとづるる夕には萩の下露置きぞ増しける 百人一首一夕話卷四 （中務）	△色香をば思ひもいれず梅の花つねならぬ世によそへて ぞ見る 新古今集一六 1445 前太平記卷第一八 古今著聞集卷五一 一四五 （華山院御製）	△わがやどの花みがてらにくる人は散りなむのちぞ恋し かるべき 古今集 67、躬恒集、古今和歌六帖六 4042 三十人撰 24、三十六歌仙、三十六人撰、 金玉集 16 新撰髓脳、 奥義抄、 井蛙抄第一、 前十五番歌合、

156	☆155	☆154	☆153	152	☆151
八	八	八	八	八	八
三四	三三	二八	二八	二八	二七
109	108	103	103	103	102
4539	4505	4392	4374	4369	4355
○花舞台の上にちりかゝりて、空に しらねぬ雪かとうたがはれ……	○第一第二絃索々 秋風弘松疎韻落 第三第四絃冷々 夜鶴憶子籠中鳴 第五絃声最掩抑 滝水凍咽流不得	○露もらぬ岩屋も袖はぬれけりとさ かずはいかにあやしからまし	○草のいは何露けしとおもひけんも らぬ岩屋も袖はぬれけり	○香は禅心よりして火なきに煙たえ ず、花は合掌に開て春にもよらず して、	○北斗星前横旅雁 南楼月下掃寒衣
上	下			上	上
131	463			394	346
△さくらちる木のした風はさむからで空にしられぬ雪ぞ ふりける 拾遺集一 64 貫之集第九 新撰和歌一 81 (貫之)	△第一第二の絃は索々たり 秋の風松を払って疎韻落つ 第三第四の絃は冷々たり 夜の鶴子を憶って籠の中に 鳴く 第五の絃の声はもつとも掩抑せり 滝水凍り咽ん で流ること得ず (五絃弾) 白氏文集卷三「五絃弾」、朗詠九十首抄、謡曲経政、 蟬丸	○露もらぬ窟も袖は濡れけりと聞かずはいかに怪しから まし 山家集下 917	○くさのいはなにつゆけしとおもひけんもらぬいはやも 袖はぬれけり (僧正行尊) 金葉集二度本九 533、今鏡第八、 古今風躰抄下 時代不同歌合、 古今著聞集卷二、五二、	△香は禅心よりして火を用ゐることなし 花は合掌に開 けて春に因らず (菅) 菅家文章卷四	△同上 全唐詩卷二八、樂府詩集卷六二、江談抄四、百人一 首一夕話卷六

☆160	☆159	158	☆157	
九	九	九	九	
八	八	四	二	
118	118	114	112	
4993	4990	4767	4652	
<p>○世をいとふイ 家にいつる人としきけばかりの宿 に心とむなとおもふばかりぞ</p>	<p>○世の中をいとふまでこそかたから めかりのやどりをおしむ君かな</p>	<p>○蓬壺の雲をふみ……</p>	<p>○人間栄耀は因縁浅、林下幽閑気味 深</p>	
		下	下	
		758	617	
<p>○いへを出づる人とし聞けばかりの宿心とむなと思ふばかりぞ</p> <p>山家集中73、新古今集一〇97、沙石集卷五（大系本拾遺五七492頁）、西行物語卷下、源平盛衰記智卷第八、十訓抄第二〇〔五三〕、謡曲「江口」</p>	<p>○世の中を厭ふまでこそかたからめ飯のやどりををしむ君哉</p> <p>山家集中72、新古今集一〇98、沙石集卷五（大系本拾遺五七492頁）、源平盛衰記智卷第八、西行物語卷下、謡曲「江口」</p>	<p>△昇殿はこれ象外の選びなり 俗骨もつて蓬萊の雲を踏むべからず 尚書はまた天下の望みなり 庸才もつ台閣の月を攀づべからず</p> <p>本朝文料卷六、江談抄六</p>	<p>△人間の栄耀は因縁浅し 林下の幽閑は気味深し（白）</p> <p>白氏文集卷六六老来生計、千載佳句幽居</p>	<p>亭子院歌合 金玉集14 三十六人撰 悦目抄 秘藏抄 古来風躰抄下 近代秀歌</p> <p>古今和歌六帖六4182 前十五番歌合、三十人撰17、 荣花物語卷三七 俊頼髓脳卷上 袋草紙卷二、三九・一八二 桐火桶 謡曲「竹雪」「高砂」</p>

☆167	166	165	☆164	☆163	☆162	161
九	九	九	九	九	九	九
一二	九	八	八	八	八	八
121	119	118	118	118	118	118
5182	5091	5061	5040	5036	5032	5021
○華をのみおしみなれたる三善野の 木の間にあつるあり明の月	○渭浜の浪をたゞみ、眉商山の霜を たれて侍る人も……	○長松の暁、さびたる猿の声を聞、 胡雁のつらなれる音をきゝ侍に は……	○髪おろし衣の色はそめぬるになを つれなきは心成けり	○わすれずとまづきくからに袖ぬれ て我身はいとふ夢の世の中	○かりそめの世には思をのこすなと きゝしことの葉わすられもせず	○狂言綺語の戯れ、讃仏乗の因とは 是かとよ
	下	下				下
	728	457				588
○花をのみ惜みなれたるみよし野の梢に落つる有明の月 (藤原定家) 続後拾遺集五 ³⁵⁸ 、自讃歌、 新三十六人撰 夫木和歌抄一三 ⁵¹⁷⁶	△太公望が周文に遇へる 渭浜の波面に畳めり 綺里季 が漢恵を輔けし 商山の月眉に垂れたり (策文匡衡) 本朝文粹卷三、江談抄五 宝物集九冊本一、神道集、朗詠九十首抄、 参考、北野縁起上	△胡雁一声 秋商客の夢を破る 巴猿三叫 曉行人の裳 を霜ほす 本朝文粹卷三	○同上 本朝醉菩提卷四	○同上 そしり草	○同上 そしり草	△願はくは今生世俗の文字の業 狂言綺語の誤りをもつ て翻して 当来世々讃仏乗の因 転法輪の縁とせむ(白) 白氏文集卷七○「香山寺白氏洛中集記」 参考、榮花物語二上、梁塵秘抄卷二 ²²² 、十訓抄序、 私聚百因縁集九一―四、柿本講式、朗詠九十首抄

表三 『撰集抄』における詩歌の出典^(注7)

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
出典詩歌集	古今集	後撰集	(拾遺抄)	拾遺集	後拾遺集	金葉集 一度本	(金葉集 三奏本)	詞花集	千載集	新古今集	新勅撰集	続後撰集	続古今集	古今和歌六帖	和漢朗詠集
原文のまま引用している場合 ^(注8)	6	1	7	7	3	5	3	2	11		2	2		5	4
部分的に用いている場合	6		4	5	3	1	2	10	17		2	9		10	7
計	12	1	11	12	6	6	5	12	0	28	2	2	11	15	11

表現が全巻に及んでいるという点で、一人の作者によって現存本のような九巻の形の『撰集抄』が成立したと想定したい。

表二は、特に『和漢朗詠集』と『撰集抄』との関連に注意して作ったものである。そのまま引用している和歌二十首、詩十二(表三・13)を含めていえば、『撰集抄』松平文庫本の数十ヶ所に渡り『和漢朗詠集』からの影響が認められる。『和漢朗詠集』所載詩歌を引用するのは巻八において最も顕著であるものの、他の巻にもその影響が及んでいることがわかる。作者は恐らく『和漢朗詠集』もしくはその注釈書の如きを手許に置き、熟読できる環境にあったであろう。このように一つの詩歌集との類似

『和漢朗詠集』以外では、『古今集』『拾遺集』『詞花集』との関連がみられ、他に、『新古今集』からの引用および類似表現が目立つ。『統古今集』（一二六五年成立）所収歌との類似は興味ある一要素であるが、『撰集抄』成立との前後関係と合わせ慎重に検討されるべきであろう。『宝物集』と『撰集抄』は、全般的に多くの点にわたって類似性が認められ、和歌のみに限らない。

以上、詩歌との類似によって特徴づけられる『撰集抄』の文章を検討した。他に仏書——特に恵心僧都の述作にみられる表現との類似^(注10)、さらに同時代の先行説話集『閑居友』の文章との類似性を指摘することが出来、この点については『撰集抄』（古典文庫 現代思潮社）解説に表示したので参照していただきたい。右の点も共に考え合わせ、『撰集抄』の説話作者は、次のような立場にある人と言えようか。

- 一 『和漢朗詠集』を初め、いくつかの歌集、あるいは歌の抜書き、注釈書などを見ることが出来る人
- 二 文中、西行の歌（例えば表二159番）を用い、筆者が詠んだ如くしていることから、歌人西行にも多大な関心を寄せ、自分もそうありたいと思っていた人物
- 三 先行説話と類似する説話も存在する点、他の説話も知り得る環境にある人
- 四 『閑居友』を手許に置いた人
- 五 『摩訶止観』の考えにも同意し、また世間に流布していた浄土教の教理を端的に示す経文などに関心を持っていた人

『撰集抄』の成立事情、作者像などを見究めたいがために、今回は、その文章が如何に多くの詩歌を踏まえて構成されているかをみた。作者は、歌を単純に歌として引用するだけでは満足せず、歌語、歌意を自分流に文章の中に取り入れ、自分の文を作り上げる。また、説話の内容から判断すると、仏教の教理も理解し、名聞利養を厭う僧の姿に同調しているといえる。即ち、話柄からも文章上からも、『撰集抄』は、和歌・仏教を自己の中で止揚統一し得た漂泊の歌僧西行を追い求めた書と言い得る。

注

- (1) 土御門院御百首に関する覚書——一異本の紹介と撰集抄との交渉を中心に——歴史と国文学25・2 昭和16・8 において、小林忠雄氏が『土御門院御百首』と『撰集抄』との関連を指摘された。
- (2) 『新古今和歌集』(日本古典文学全集) 頭注(二〇〇頁)に依った。
- (3) 『撰集抄』形成私論(二) 小島孝之氏 実践紀要20 昭和53・3 においても『和漢朗詠集』注釈書と『撰集抄』との関連が指摘される。拙稿『撰集抄』における「元亮」について(芸文東海1 昭和58・6)も若干その点について触れた。
- (4) 『尊氏講式』は、国文学研究資料館 調査研究報告 第四号 山田昭全氏の翻刻に依った。
- (5) 『玉台新詠』巻一にもみられる。「胡馬嘶北風」とあり、『撰集抄』本文に似る。
- (6) 『江談抄』以下「鶴飛千里未離地」とあり、『撰集抄』に似る。『江談抄』に類する場合は他にもみられ、何らかの経路を経て『撰集抄』本文にとり入れられたと考えられる。
- (7) 便宜上「出典」としたが、同じ歌がいくつかの書に載せられることもあり、必ずしもその書から引用したとは限らない。二書以上に類歌がみられる時は、重複して数えてある。
- (8) 連歌風に二分して記されるものもこの欄に加えた。
- (9) 『撰集抄』における類似の表現は各々一つに数えた。
- (10) 『撰集抄』における仏教的表現については、昭和五十九年六月十七日の仏教文学学会大会にて、恵心僧都の述作中に類似表

現の多いこと、浄土教思想の影響も無視できない点を指摘した。また、刊行予定の『撰集抄』（古典文庫 現代思潮社）解説に、仏教的表現全般にわたり表示した。